

基調報告・ファシリテーター：川村千鶴子（大東文化大学）

移民の人生とライフサイクル — 移民政策の視座

Immigrants and Life Cycles: Rethinking Migration Policies in Japan

Chair and Facilitator KAWAMURA Chizuko (Daito Bunka University)

戦後 70 年、トランスナショナルな人の移動は、日本社会の多様性と多様な人びとの人生を映し出した。介護や家事労働、建設現場の労働力不足による補充移民を受け入れるという発想ではなく、移民を受け入れるということは、移民の人生を日本社会が受容することである。

2015 年、日本はまさに内発的な移民政策のビジョンを打ち出す時を迎えている。

ライフサイクルに基盤をおくことは、「生」から「死」へ、次世代へと歴史的人間の意味を明らかにし、そこに連続性が映し出される。またファミリー・ライフサイクル(家族周期)の時間軸を重ね合わせることによって過去から現在、そして未来を展望し、多文化を肯定的に受容する視座を生み出すこととなる。

本シンポジウムでは、①産声を上げる子どもの国籍と無国籍、②インターナショナル・スクールの変容、③大学内のダイバーシティ、④地方都市の活性化と可能性、そして、⑤トランスナショナルな多文化家族について、それぞれのパネリストが、多文化意識の形成や異種混雑性を可視化し、多文化空間の内実を明らかにする。さらに、そこに浮上するさまざまな矛盾や法的整備の遅れを鋭く指摘しつつ、日本の社会統合政策への道を考える。

二世・三世から四世の時代を迎え、移民研究の射程は、移民の人生とライフステージにある。出産・育児から就学、キャリア形成、まちづくりへの参画、家庭生活、老後の生活、医療、死や弔いに至るライフステージに着目すると、それぞれ多様なケアが不可欠である。ケアは、共に生きる人びとの相互行為であり、トランスナショナルな社会空間の形成にとって潤滑油である。

このように多文化共生政策は、文化的多様性を尊重するだけでなく、移民、難民、無国籍者、障がい者、亡命者、母子家庭など多様な生活者と共感をもち、人権の概念を大切にし、異種混雑性を重視できる思いやりの社会のための政策であり、移民政策の柱である。

シンポジウムの後半では、法政策の「多様性」と都市エスニシティ研究の立場からの各報告に対する問題提起がある。